

シラチャ校だより

泰日協会学校
シラチャ校

2023. 4. 21



シラチャで学ぶ、シラチャで教える、シラチャで育てることの意味

シラチャ日本人学校 校長 藤枝茂雄

先日は野球の WBC が日本の劇的な優勝で幕を閉じたが、それに代表されるように近年はオリンピックやワールドカップなどでも、日本チームの躍進がめざましいものがある。中でも、日本のお家芸と呼ばれてきたものではない種目、例えばラグビーやサッカー、バスケットボールなどでの躍進が目立つ。これらの種目で日本チームが国際大会で通用するように成長する過程を見たとき、いずれも外国人監督が大きな役割を果たしていることに気付くが、そこで注目されるのが、外国人の監督による従来の日本チームの体格以外の部分での決定的な弱点の見極めとそれを克服するためのアプローチである。

例えば、2015 年のラグビーワールドカップで優勝候補とされた南アフリカを破る殊勲をあげた日本チームの監督エディー・ジョーンズ氏(オーストラリア)は、監督に就任した時、日本チームの中に深く根付いている「レギュラー」と「補欠」を区別する文化に愕然としたという。「補欠」という立場を自他共に認識した選手は、試合後に補欠を意味する背番号のユニフォームを一刻も早く脱ぎ捨て私服に着替えようとしていることに彼は気がついたようだ。当然チーム内のレギュラーと補欠の選手の間には心理的な溝ができていた。しかし、エディ監督のチーム作りのコンセプトには「補欠」とか「控え」とかという概念は一切なかった。先発しないメンバーはすべてその人の能力が最高に生かせる場面に向けてスタンバイしているれっきとした「レギュラー」なのである。彼がこの思想を徹底的に選手にたたき込むことによって、それぞれの選手の意識ががらりと変わったという。そして、そのチームが南アフリカを破ったのである。

私は前回のサッカーワールドカップで森保ジャパンがドイツを破ったとき、このことを思い出した。あのゲームで 2 点をたたき出した堂安選手も浅野選手も先発メンバーではない。しかし、彼らは自らを「補欠」とは思っていない。彼らが必要とされる最高の場面のために満を持して待機していたレギュラーなのだ。森保監督は、まさにエディ監督と同じ着眼点により、伝統的な「選手観」の指導者では打破できなかった文化や風土を克服するチーム作りを積み重ね、それがこの試合で花開いたのではないだろうか。

私たちは今、シラチャに住んでいる。海外に住むということは、日本国内だけの見方や考え方で形成されてきた様々な負の風土の部分に気付く最大のチャンスである。学校教育についても同様である。今年度の派遣予定者に対する文科省による事前研修の内容からは、例えば、教師に対しては「学びの個別最適化」、管理職に対しては「選ばれる学校づくり」、経営サイドや PTA に対しては「コミュニティスクールの理念を反映した日本人学校づくりや、それへの参画の在り方」という今日的な課題への対応が結果として求められていることがひしひしと伝わってきた。これらがことさらに強調されるのは、それが社会の変化に伴って必要とされる変化や進化であることは分かっている、国内の学校(教育委員会を含む)、保護者、地域社会などの固定された風土の中では改革が遅々として進まないからであろう。

このような国内の学校が苦戦している停滞に挑戦する総合力はシラチャ校、バンコク校などタイの日本人学校には間違いなく存在している。だからこそ、文科省も東京学芸大学もタイの日本人学校での先進的な現状打破のモデルとなる取組とその実践研究に期待しているのである。

赴任した先生がシラチャ日本人学校を去るとき、子どもたちや保護者から心から惜しまれる先生になるように努力することは、最も分かりやすい派遣教員としてのミッションである。そのミッションを実現する鍵は、日本国内の教育の現状を批判的かつ建設的に評価し、国内の公立学校に固定化された負の風土とは何か、そして、それを破るということは学校関係者がどうすることかを考え、実際に行動することから始まる。それが、シラチャで学ぶ子どもたちのために私たちができる最善の「生きる力の育成」であり「進路保障」ではないだろうか。